

## 正倉院の新発見上代錦(前篇)

### 凡例

- 一、各説の配列順序は、おおむね文様の簡単なものから複雑なものへと列べたが、厳密なものではない。またこの順序は、必ずしも様式の変遷とは一致しない。
- 一、各文様の名称は、すべて筆者の私見による仮称である。
- 一、今回報告する各文様の番号には、書陵部紀要一三号「正倉院の錦」にすでに採録されているものとの混同を避けるため、「新」の頭書を付けた。また文中に引用する右記紀要採録品の番号は単に№——とした。
- 一、各説中に記す糸込み・文様の寸法は、比較的保存状態の良い部分二、三箇所についての平均値である。
- 一、図版は原則的に裂の経方向を上下に置いた。例外については矢印で経を示した。
- 一、図版ページ数の関係で、一つの文様の図版がカラーとモノクロの両方に亘る場合がある。また配列順序も前後している。
- 一、図版・挿図の写真は、大部分が正倉院事務所山中五郎技官の撮影、一部は部外業者の撮影である。
- 一、各説中の白描図はすべて筆者の作成である。

松 本 包 夫

### まえがき

正倉院宝庫に伝存してきた老大な上代錦の様相については、かつて書陵部紀要一三号(宮内庁書陵部、昭和三十七年三月発行)に「正倉院の錦」と題して、当時の正倉院古裂調査員太田英蔵・佐々木信三郎・西村兵部の三氏により、昭和三十六年までの調査分について発表されたのが、最も体系的な報告である。そこには綴錦以下一〇指に余る種々な組織と一五〇種類の文様が挙げられている。しかしそれ以後、染織品の整理の進行に伴ない、右の報告に載せられていないさらに多くの新種錦が発見された。もっともその内容は、文様一単位が殆んどわかるような完全なものから、ごく一部分しか窺えないものまでさまざまだが、筆者が調査したところでは、昭和五十九年度末現在で新種の数は約七〇種類に及び、

そのうち文様一単位のほか半分以上がわかったものは三六種類に達し、また特殊組織になるものも四種類が発見された。本稿は右の新発見錦計

各 説

四〇種類の調査報告である。しかし、正倉院の染織品は現在もなお整理が進行中である。今後の整理によって、現在では文様のごく一部分しかわからないものの全貌があらかになったり、さらに新しい種類が発見される可能性は少なしとしない。したがって本稿も、ある程度数量的に新種をまとめることのできた昭和五十九年という一時点でのいわば中間報告である。単に錦ひとつに限らず、正倉院染織の全貌は、その整理の完了をまって、はじめて明らかになるのである。

つぎに本調査報告の形式は、右記四〇種類中、特殊組織四種類を除く三六種類を文様系統別に分類し、さいごに特殊組織をまとめて、

- 一 花文系 二二種類 (新1~22)
  - 二 動物唐花文系 二種類 (新23, 24)
  - 三 唐草文系 五種類 (新25~29)
  - 四 幾何学文系 四種類 (新30~33)
  - 五 その他の系統 三種類 (新34~36)
  - 六 特殊組織 四種類 (新37~40)
- の六項目にわけ、各項目にわたって順を追って、種類ごとに各説として述べることにした。紙数のつごうで、本号にはその第一項、花文系二二種類の報告のみにとどめたが、次号において残り全部を採り上げ、あわせて総合所見に及ぶ予定である。

一 花文系 (新1~22)

新1 黄地小花葉文錦 (カラー図版No.1)

〔資料〕 褥の縁裂風小残片七片。

〔所見〕 復様三枚綾組織の経錦。黄地に一種類の文様が千鳥配置で反復している。文様は、下部に短かい三枝の茎をもつ縦長の扇形花葉文で、経方向に対し横向きにあらわされている。文巾(緯方向)約一・五種、文丈約一・二種と非常に小型で、形式も本稿採録の花文中最も簡略な初期の様相を示している。文様の中央部(A、巾約〇・二種)は白と濃緑、その左右の中間部(B、巾約〇・三種)は紫と濃緑、左右のいちばん端の部分(C、巾約〇・八種)は濃緑であらわす。すなわち地の黄色を加えて、二重経一組(C)・三重経三組(BAB)・二重経一組(C)の順に反復するわけである。経はS撚、緯はすべて白で殆ど撚りがなく、経緯の太さはほぼ同様である。資料はすべて小片だが、巾約三・七種の緩くカーブした帯状や、削形をつけた帯状に裁ったもの(図版参照)があり、その形よりしておそらく多稜花形褥の縁裂であったと思われる。糸込みは一纏に、表に出る経約三六本、母緯約二〇越。

新2 白地小花文錦 (カラー図版No.4)

〔資料〕 半臂の袖一点。

〔所見〕 複様三枚綾組織の経錦。文様は、八弁の花弁のそれぞれの間に小三葉形を派生させた花文一種類が、千鳥に配置されているだけの簡単な構成だが、配色は二種類にわかれている。すなわちその一種(A)は、中心部が赤・緑・黄、中間部が赤と緑、左右端の小三葉形は赤。また一種(B)は、中心部が赤・縹・紫、中間部が縹と紫、左右端の小三葉はAと同様赤であらわされる。したがって地の白経とあわせて、三重経の帯(巾約〇・八櫃)の間に二重経の帯(巾約一・二櫃)と四重経の帯(巾約一・六櫃)が一つおきに挟まれているわけである。文中約四・五櫃、文丈約四・二櫃と小形で、かつ主・副文の区別がない点は、花文の発達過程上初期的だが、文様じたいは、図掲のとおり周囲が花弁と小三葉形との二重構造で、やや複雑になってきている。緯はすべて淡い白茶。糸込みは一櫃間に表に出る経約四三本、母緯約一七越。

新3 黄地小花文錦 (モノクロ図版No.1)

〔資料〕 用途不明裂残片二片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の経錦。配色を大掴みに眺めると、黄地に緑と茶紫文の帯部(A、巾約四櫃)と、黄地に赤と茶紫文の帯部(B、巾約五・七櫃)とが、交替に並んでいる。そしてABそれぞれの内部は、巾〇・四〜〇・九櫃の広狭数種の二重経、三重経、および文様のない黄無地部から成り立っている。黄無地部は表面に出ない同色経との二重経である。茶紫経は全体に朽損欠落がはなはだしい。Aの帯中の文様は、緑を主体とし中間部に茶紫を加えた六弁小花文(文丈約三・五櫃、文中約三・四

櫃)が約二櫃間隔で縦に並び、その間の左右に緑の小花葉風文様が配されている。Bの帯中の文様は朽損の多い茶紫が主体で赤は一部に加えられているにすぎないため、ほとんど判じとることができず、わずかに帯の片端あたりに茶紫の細い唐草風文様が認められるにすぎない。緯はすべて黄色で、経緯の太さはほぼ同じ。糸込みは一櫃間に表に出る経約三四本、母緯約一二越。

なおこの裂は、表が本件の錦、裏が黄緇で、芯に紙を入れた細長形で、一端を花形に割っている。花形部の巾一四・五櫃、他方の端の巾一二櫃、丈は中間が欠けて二片にわかれ、七六櫃と二四櫃である。形状からして、細長い箱の観かと思われる。

新4 段地花文錦 (モノクロ図版No.2)

〔資料〕 用途不明裂小残片九片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は、内外二層各四弁の菱形花文一種類を千鳥に反復したものである。用彩は、緑、浅緑、紫、淡茶、淡樺、白の計六色だが、その配彩は、(1)緑地に白と淡樺文 (2)淡樺地に白と紫文 (3)緑地に白と淡茶文 (4)紫地に白と浅緑文 の四系統が認められる。すなわち各部分三重緯の薄い錦である。資料中の二片には地色の切替部があらわれていて、右四系統中の(1)と(2)(図版)、(3)と(4)がそれぞれ横一直線の段状に隣接していることがわかる。しかし資料がすべて小片なので、右記四系統以外にべつな配色部があるのか、また右記の(1)と(2)、(3)と(4)以外の段の接続順序、各段の上下巾など、すべて不明である。文様

の径は縦横とも約四・七櫃。段地の薄い錦であることや、小形で簡明な文様のかたちなどからみて、花文の初期の段階というよりは、逆に豪華な大唐花文が簡略化していく過程上の作品と思われる。経はすべて黄で、緯の約三分の一と細い。経緯ともほとんど撚りはない。糸込みは一櫃間に表に出る緯約二六越、母経約二四本。

新5 紫地花文錦 (モノクロ図版No.3・4)

〔資料〕 房付幡の身部の上または下縁残片一片、用途不明裂残片一片。  
 〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。資料二片をあわせると副文は全体がわかる。主文は中央部が欠けていて、左右方向の端の部分約三分の一があらわれているにすぎないが、No.61(挿図)風の八弁花文と思われる。副文の径約五・七櫃。およその配色は、アズキ色風の紫の地に、文様は主・副文とも深緑で縁取り、内部は黄色が主体で、それに地と同色の紫と、主文の一部に赤、副文の一部に淡い水色が使われている。また現在黄色



No.61 黄地唐花文錦

を呈する部分のうちに本来は白だったかと思われる箇所もある。すなわち五または六重緯である。かたちの違った二種の花文を千鳥に配するこの形式は、唐花文に類するが、文様が小さくて主・副文の寸法にほとんど

ど差がないようにみえる点は、まだ花文の発達上比較的早期の段階にあることを示しているといえよう。経はすべて淡茶で、陰経は二本引揃えとしている。糸込みは一櫃間に表に出る緯約三〇越、母経約二〇本。なお、資料中の後者(図版の副文部)は巾二・五櫃、現長一一櫃の細長形で、これも本来は前者同様、房付幡の縁と思われる。

新6 白地丸形花文錦 (モノクロ図版No.5)

〔資料〕 幡脚垂端飾七枚。  
 〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は八弁花文であるが、外周の花弁のカーブが非常にゆるやかで起伏がほとんどないため、一見丸文に近い。花文の構成は、まんやかに二重の円をおき、そのまわりに内捲きの萼片から派生する花葉八顆を密な間隔で配し、いちばん外側に前記のゆるいカーブの八弁がめぐらされている(挿図参照)。文様の径は約六・七櫃と、



← 緯方向

□白 ■縹 ■紅 ■茶紫

新6 文様復元図

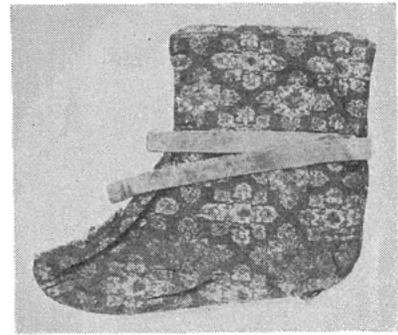
比較的小さいが、唐花文的形式は一応整えている。地は白。文様は白、縹、紅、茶紫の四色で、各部の

輪廓はすべて茶紫としているが、各資料ともいま縹と紅はほとんど茶色に、また白は淡白茶色に変色している。経糸はすべて白で、陰経は二本引揃えとしている。資料はすべてこの文様が一顆あらわれているだけで、これ以外に副文にあたるべつの文様があるのか、また配置方式がどうなのかは、わからない。しかし図版の上下の白地だけの段の部分の破れ目を覗くと、白と浅縹の糸をゆるく撚りあわせた太い緯が、表面に出ずに地の白緯と同口に通っているだけで、他の色緯は入っていない。したがって、文様はおそらく横段状に、上下に若干巾の空地をおきながら併列しているものと思われる。ちなみに資料はすべて天平勝宝九歳の聖武天皇一周忌斎会用道場幡の垂端飾である。糸込みは一縹間に、表に出る緯約四〇数越と多く、母経は約二〇本である。

新7 浅緑地花文錦 (カラー図版No.3)

〔資料〕 深形襪九隻(いずれも口縁に本件の錦をめぐらす)、浅形襪一七隻。

〔所見〕 複様三枚綾組織の経錦。文様は一種類の集花文を千鳥に配置しているが、ハツリ目があらくて、細部には図様のはっきりしないところがある。配色は、地は浅緑、文様の中央部は紫に赤の縁取りとし、さらにその外側を白で二重に括る部分もある。また文様の左右部は紫に黄の縁取りとする。すなわち、地色とともに四重経の部分と三重経の部分とが交替に繰返しているわけである。右の二種類の部分の巾は、資料ごとの伸縮状態の違いによって一定ではないが、四重経の部分は五・五種な



No.59 紫地花文錦 (挿図1)

いし六・三種巾、三重経の部分はそれより狭くて一・六種ないし一・九種巾。したがって文巾は広いもので約一〇種、また文文は約一二・四種である。経錦の花文としては、これまで知られていたものなかではNo.59(挿図1)が最も進化した形式であったが、本件の構造はそれよりも複雑で、かつ上代

の花文系経錦中、いちばん大形である。資料中、浅形襪の一隻是、口辺内に「東」後一鼓撃襪 天平勝宝四年四月九日」と墨書があり、東大寺大仏開眼会の伎楽用品であったことがわかるが、その年代からして、経錦花文の成熟の最終的様相とみなせよう。緯糸はすべて浅緑と紫の二



新7 組織拡大図 (挿図2)

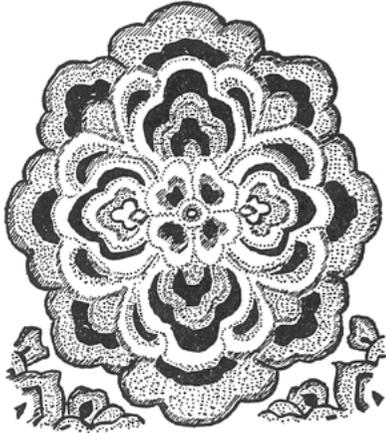
本の引揃えである。挿図2にその濃淡二色をはっきりとあらわれている。糸込みは一縹間に、表に出る経約三六本、母緯約一四越。ちなみに本件と同文様で地色

を深緑に変えた裂が、使用時不明の天蓋の頂部荘飾の裁文に用いられている。

### 新8 浅紅地花文錦 (モノクロ図版№6・7)

〔資料〕 天蓋垂飾八枚。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は二種の花文の千鳥配置で、そのうちの一種は、中心に四弁花を置き、その周囲に花卉の層をほぼ三段階に重ねていき、外形を八花形に整えたかたちである。通常の唐花文のように文様の中央部に空地を作らない点、またすべての花卉が間隔を空けずに重なりあっている点は、単に花文というより、重ね花文とも称するほうがふさわしいようである。文丈約一二種、文巾約一一種。なお、もう一種の花文は図版上段の裂にごく一部がみえるにすぎず、全体はわからないが、二種の花文の間隔が非常に接近しているのが、やや特徴的



新8 文様復元図

である(挿図参照)。用彩は、地部は浅紅、文様は茶紫、浅縹、浅緑、黄、白の五色だが、茶紫以外の四色は、はっきりと区別しにくい部分が

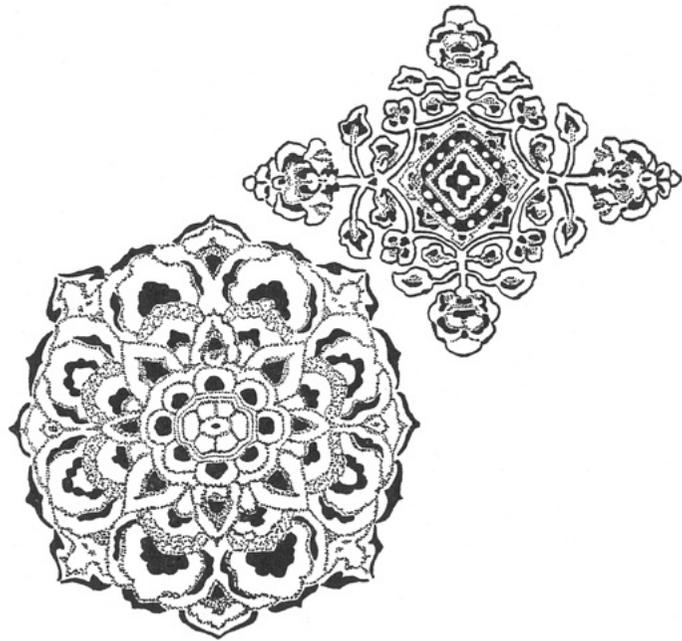
ある。経はすべて黄褐色。糸込みは一纏間に表に出る緯約二八越、母経約二〇本。なお資料は前記の八枚以外に、天蓋の縁裂のあいだに挟まれていた垂飾の上端部の残片が若干片存在している。図版№6はその一つである。天蓋本体の使用時は不明。

### 新9 赤地花文錦 (モノクロ図版№11・12)

〔資料〕 幡身の長側縁裂一件、幡脚垂端飾二三枚、天蓋頂部の花形裁文一件。

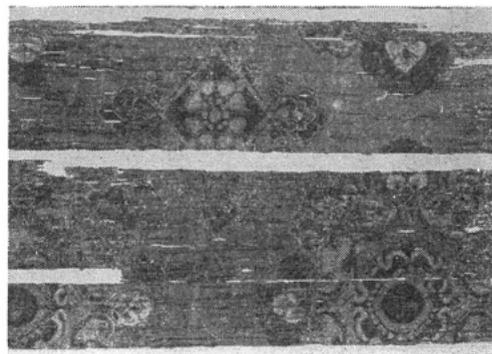
〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部は濃赤色、文様は地部と同じ濃赤色のほかに、紫、浅緑、白の三色がみえるが、資料はすべて退色度が強いので、浅緑と白の区別がつけにくい部分が多く、またもとは黄色も使われていた可能性もある。経はすべて淡紫。文様は、細部にやや不明瞭なところもあるが、各資料相互に欠部を補って復元すると、だいたい挿図1のとおりで、径約一四種の八弁花文の主文と、菱形花葉文の副文との千鳥配置である。主文は中央に空地を作らず、中心の八弁花から外側へと花卉が数層重なりながら拡大していく。すなわち前件の新8と同様、重ね花文形式であるが、本件は新8に較べると文径も大きく、花卉のかたちも変化があり、重なりも多く、前者より発達している。つぎに副文は前述のように菱形花葉文であるが、その中央に菱形連珠帯の宝飾文様をあらわす点が注目される。このような菱形をもつ副文は、№74の蓮唐花文錦(挿図2)にすでにみるところだが、唐花文系文様の正統的副文から変化した後期的様式と考えたい。したがってこのような副文

と組合わされている主文の重ね花文も、唐花文に至る前駆的形式というよりは、むしろ完成した唐花文が再び略式化していく過程上に位置づけらるべきではなからうか。ちなみに資料の幡はすべて聖武天皇一周忌齋会用の道場幡、また天蓋は使用時不明である。糸込みは一纏間に、表に出る緯約二二越、母経約一四本。なお次号に掲載予定の新39緑地花文錦を幡身縁に使っている紫綾幡(使用時不明)の頭部の複様三枚綾組織赤地緯

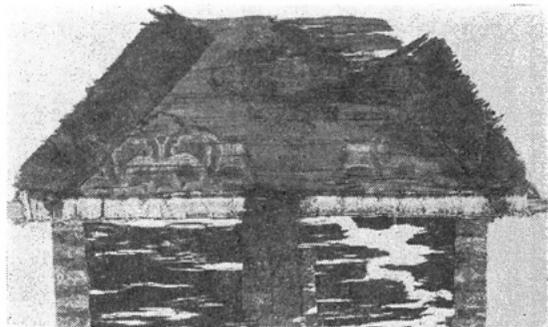


新9 文様復元図 (挿図1)

錦の文様は、主文は本件と同文だが、副文のかたちが違っている(挿図3)。  
**新10** 赤地花文錦 (モノクロ図版No.13)  
 〔資料〕 用途不明裂残片一片。  
 〔所見〕 資料の裂は上下の最長一四・五纏、左右の最広巾三六纏の残片だが、まわりが欠け、経が切れておよそ七片に分断し、ところどころですこし左右にずれている。挿図1はそれを修整しておよそのかたちを示したものである。複様三枚綾組織の緯錦で、用彩は、地部が暗い赤、文様部は地と同色の赤および浅緑、黄の三色であらわされるが、表面の擦



No.74 赤地蓮唐花文錦 (挿図2)

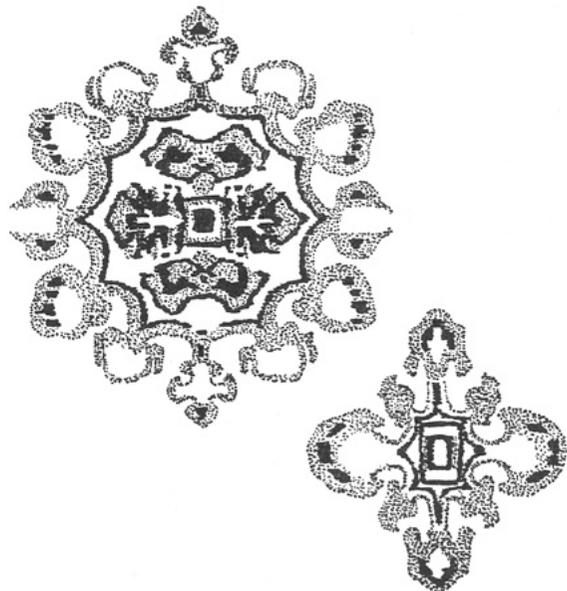


紫綾幡頭の錦 (挿図3)

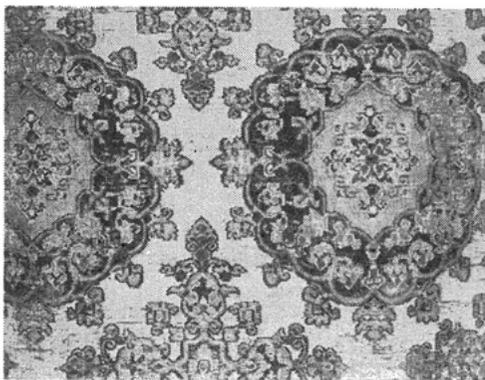


№63 白地唐花文錦 (挿図2)

損のため、浅緑と黄の境い目はおおむね明確でない。経はすべて椗色。文様は、主文と副文との千鳥配置で、主文は周圍に一二顆の花葉を放射状に派生させた花



新10 文様復元図 (挿図1)



№64 白地唐花文錦 (挿図1)

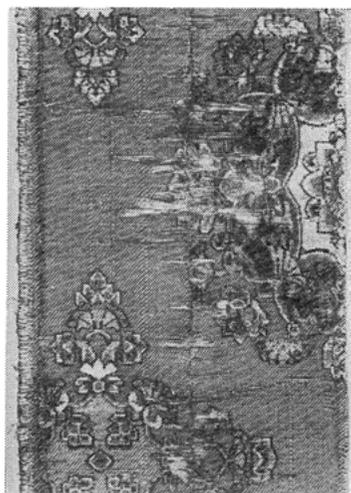
びた部分とがあり、あるいは本来別色だったのかもしれない。経はすべて浅縹。主文はほぼ円形の花文で、周圍に側蓮華、開蓮華、花葉など、四種一六茎の小文様を放射状に派生させている。また主文の内部は、黄と紫の二重の空地を設けている。すなわち、№63(前件挿図参照)や前件の新10を複雑化したかたちで、№64(挿図1)、73(挿図2)と同系列に属する一種の変形唐花文である。外まわりの放射状小文様と

文、副文は菱形花文である。主、副文とも№63唐花文錦(挿図2)に類似しているが、主文の径は約九・五種と、№63より大きく(№63は主文の径約八・五種)、周圍の花葉も大きさとふくよかさを増し、唐花文的感覺に近づいている。糸込みは一種間に、表に出る緯約二八越、母経約一六本。

新11 縹地唐花文錦 (カラー図版№2)

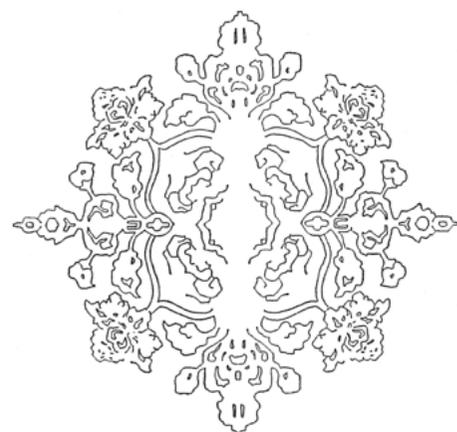
〔資料〕 房付幡頭三片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部が縹、文様部は紫、赤、縹、浅緑、黄、白の六色だが、黄は呈色鮮やかな部分と、やや濁りを帯びた部分とがあり、あるいは本来別色だったのかもしれない。経はすべて浅縹。主文はほぼ円形の花文で、周圍に側蓮華、開蓮華、花葉など、四種一六茎の小文様を放射状に派生させている。また主文の内部は、黄と紫の二重の空地を設けている。すなわち、№63(前件挿図参照)や前件の新10を複雑化したかたちで、№64(挿図1)、73(挿図2)と同系列に属する一種の変形唐花文である。外まわりの放射状小文様と



№73 赤地蓮唐花文錦 (挿図2)

中央部とを扇形の内向側蓮華で連絡させている点は、とくに№73と強い近似性をもっている。しかし本件の放射状文様は、№73のような硬さがなく、また№64より



新12 主文概要図

様は、唐花形の主文と菱形花文の副文との千鳥配置であるが、主文の外まわりの花葉文を繋ぐ蔓のカーブが、通常の唐花文の場合は内反りの八稜形に圍繞するのに対し、これは外反りの四稜形にまとめら

も変化と写実さに富み、すこぶる精緻にあらわされている。主文の径約八・五糎と比較的小さいが、この種の変形唐花文のなかでは最も優れている。副文も主文と同巧の表現を示し、両者あわせて文様全体に繊細な優美さが漂っている。前件の新10は、初期的な花文から唐花文へ発達していく過程の感覚が強いのに対し、本件は重厚豊満な本格的唐花文から解放された、あきらかに後期的作品である。糸込みは一種間に、表に出る緯約三七越、母経約一六本。資料の幡の使用時は不明。なお本件と同文様・同組織で、緑地に黄で頭文し、輪廓を茶紫とする三重緯の錦の小残片が十数片存在している。

新12 赤地唐花文錦 (カラー図版№5、モノクロ図版№8)

〔資料〕 幡脚垂端飾三枚。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部が赤、文様部は黄、浅緑、黒紫、および地部と同色の赤の、計四色。経はすべて淡茶色である。文

れている点が非常に珍らしい(挿図参照)。資料の垂端飾がすべて天平勝宝九歳の聖武天皇一周忌齋会用道場幡のもの、すなわち錦の文様に大小各種の唐花文が最も頻繁に使われている時期のものであることからして、そのような時流のもとに作り出された唐花文の一つの異形と解すべきであらう。

なお、副文の左右に派生する側花の茎が輪状になり、これに一幹二茎の蕾の茎が重なる形式は、№73蓮唐花文錦(前件新11の挿図)の副文に類似がある。資料全部をあわせても、主、副文の中央部にすこし文様のわからない部分があるが、主文の巾はおよそ二〇糎である。糸込みは一種間に表に出る緯約三〇越、母経約二〇本。

新13 黄地唐花文錦 (カラー図版№12)

〔資料〕 天蓋垂飾一枚、緑綾几帯の端飾一件。

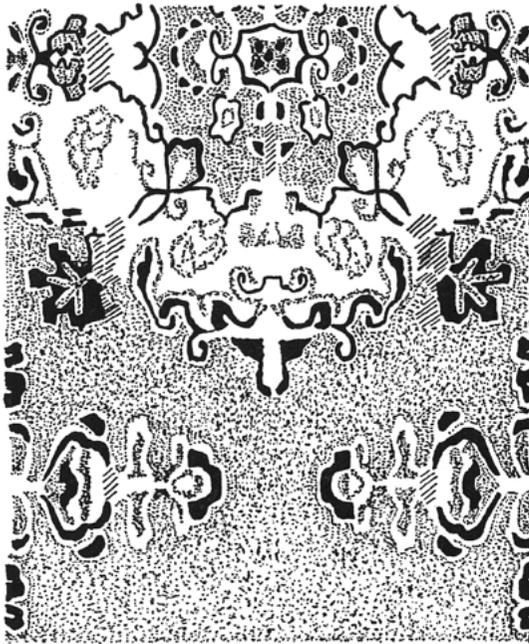
〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部が黄、文様部は白、浅緑、浅緑、浅紅、紫および地部と同色の黄の、計六色。経はすべて黄土色である。文様は主文と副文の千鳥配置で、主文は、中央に複合六弁花をおき、外まわりに二種一二顆の団扇形側花をめぐらせ、内と外を結節のある蔓でつないだかたち、また副文は菱形花文である。空地が少なく、主、副文のあいだがいちぢるしく接近している。主文は径約二八釐で、花文系の上代錦としては、No.75浅緑地大唐花文錦（主文径約五三釐）、No.79縹地唐花文錦（同約四四釐）、および後掲の新21赤地大花文錦（同四〇釐余）につぐ規模をもっている。主文の外まわりの一二顆の団扇形側花は通常の唐花文の場合のように重なりあわず、それぞれに単独であらわされている。このような形式は、既掲の新10、新11をはじめ、上代花文系錦綾の一形式として、少なからずみうげられるところであるが、この形式の花文は概して小形やかたちの簡単なものが多く、本件ほど大形は珍らしい。これらの団扇形側花はかなり豊満で、副文の蔓も力強く、奈良盛期の錦文の雄渾さをよく伝えているので、正統的な唐花文へ発展する前段階とみるよりは、完成した唐花文が略式化していく初期的作品と解したい。資料中、天蓋垂飾は使用時不明だが、緑綾几帯は「花机帯長天長勝寶四年四月〇日」と墨書があり、東大寺大仏開眼会の用品であることがわかる。五年後の聖武天皇一周忌齋会時ならばともかく、この時期の用品にすでに本件のような大形の略式唐花文があらわれていることは、

一応注目に値いするものといえよう。糸込みは一縦間に、表に出る緯約二九越、母経約一八本。

新14 紫地唐花文錦（モノクロ図版No.9・10）

〔資料〕 天蓋上面の隅花形裁文一件、用途不明裂片八片。

〔所見〕 本件と次件は、唐草によって構成された唐花文形式の文様である。本件は複様三枚綾組織の緯錦。紫、緑、黄の三重緯で、紫はすべてやや濁り味を帯びている。資料がどれも小片なので、それら相互に欠を補ない、きれの歪みなどを修整して、挿図のとおり復元したが、なお主文の左右端と副文の中央にかかる経方向の帯状部が欠けている。主文は



図案 ■ 紫 □ 緑 ▨ 黄 ▩ 不明 ← 緯方向

新14 文様復元図

文丈約一七種、中央空間は紫とし、そこに黄色を基調とし緑と紫を加えた八弁花文を置き、周囲には右の三色から成る唐草を内外二重にめぐらし、内外の唐草間の空地は黄色とする。内側の唐草は八方に葡萄風果房を、また外側のもは斜め四方に掌形葉文を配している点やや特徴的である。なお副文は前述のように中央部が不明だが、唐草を菱形花文風にまとめたかたちと思われる。経はすべて黄で、陰経は二本引揃えとする。糸込みは一極間に表に出る緯約二三越、母経約二〇本。資料の使用時はすべて不明。

**新15** 黄橡地唐花文錦 (カラー図版No.9)

〔資料〕 天蓋垂飾一〇枚。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。主文と副文を千鳥に配した構図だが、副文の全貌は不明である。用彩は、地部の黄橡と、文様部の黄、白、紫、縹、緑の、計六色が識別できる以外に、主文の外側四方の蓮華の各花卉の中心に浅紅かと思われる色もうかがわれる。経はすべて黄色である。主文の周囲の唐草に、蓮華と葡萄風果房とを共存させる意匠は珍らしく、またその唐草の蔓に爪状の小葉をあしらう点も他に例がないが、主文の周囲の蓮華や扇形側蓮華のかたち、および文様全体にわたって感じられる硬さはNo.73(既掲新11の挿図)に近似している。前件の新14と同様に唐草による唐花形構成の文様であるが、新14に較べて規模も小さく、構成も簡略になり、かつ形式化がいちぢるしい。新14よりあきらかに後期的様相である。主文の丈約一一・七種、巾約九・七種。糸込みは一極間に

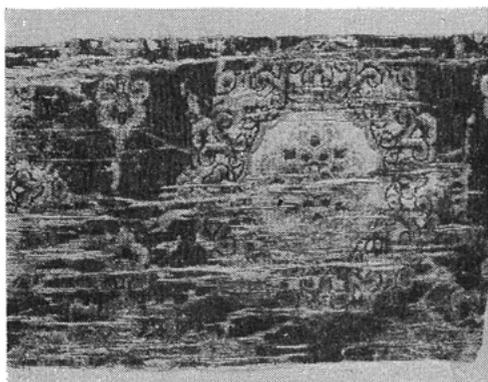
表に出る緯約三四越、母経一八本。資料の天蓋は使用時不明。

〔備考〕 東京国立博物館にも本件と同文様の天蓋垂飾が所蔵されている。したがって本件は厳密な意味で新発見とはいえないが、書陵部紀要一三号の報告には載せていないので、ここに採り上げることとした(『上代染織文』13図下、『ミュージアム』昭和59年6月号長崎巖「東京国立博物館保管上代錦の文様」図36)。

**新16** 赤地唐花文錦 (カラー図版No.13)

〔資料〕 幡身の長側縁一件、幡脚垂端飾一枚。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は、唐花形の主文と菱形花文の副文との千鳥配置で、配彩は、地部が赤、主文は中央の空地を黄、外周の



No.68 深紫地唐花文錦

八弁の花葉は黄のもの緑のものとを交互に配し、それらのあいだを埋める扇形側花は黄、また外縁取りは紫、内部各バートの輪廓は紫と赤を併用する。副文の配彩も主文にほぼ準じている。経はすべて橡色。文様的には、主文の周囲の扇形側花の外縁と副文の一部に小珠文を連ねている点やや特異なことを除けば、No.68(挿図)、78などと同

様、ごく普通の唐花文錦である。正文の寸法も、丈約八・七種、巾約八種と小さい。資料の幡が、いずれも天平勝宝九歳の聖武天皇一周忌齋会用道場幡であることもあわせて、その時期に多産された国産唐花文錦の一例と思われる。糸込みは一程間に、表に出る緯約二六越、母経約一四本。

新17 紫地唐花文錦 (カラー図版№7)

〔資料〕 天蓋の縁裂二件。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部は紫、文様は、地部と同色の紫、赤、橙黄、黄、やや濁りのある浅緑の五色だが、現在黄一色にみえている部分には、もと白も使われていた可能性もある。経はすべて紫。文様は唐花形の正文と副文との千鳥配置だが、副文は先端が僅かにみえるにすぎない。正文は、唐花文としての形式、要素を具備しているが、文中約九種と比較的小さく、そのなかに各種の開花、側花、花卉などが組みこまれているために、やや煩瑣で暢びやかさが乏しい。№68 (前件の挿図)や前掲の新16などと同様に、国産の唐花文緯錦がしだいに雄大きさを失ない、類型化、小形化していく過程上の作例と思われる。糸込みは一程間に、表に出る緯約二八越、母経約一六本。なお資料の天蓋の使用時期は不明である。

新18 紫地唐花文錦 (カラー図版№6、モノクロ図版№14)

〔資料〕 天蓋垂飾二枚と同残片数片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は、文中約八・八種の比較的小型

の八弁唐花の正文と、菱形花文の副文とを千鳥に配したものである。配彩は、地部は紫、文様は、正文の内側の空地は深縹、外側の空地は黄、副文の中央の空地は黄、主・副文の中央の花文および周囲の大小各種の花葉や側花は、深縹、紫、浅紅、黄、白、また主・副文ともに外縁の輪廓はすべて深縹で括っている。経はすべて淡紅。文様的には、副文の斜め四方に突出する小側花の茎が縷れ形になっている点にやや目新らしさがある以外、とくに顕著な特徴もない、ごく普通の唐花文である。しかし正文の周囲の八弁は重なりあわずに間隔をひろくとり、中央の花文も通常の唐花文のものに較べると小形で、そのぶん内側の深縹空地がひろくなっていて、№68 (既掲新16の挿図)や前掲の新17のような煩瑣な感じはない。糸込みは一程間に、表面に出る緯約三四越、母経一八本。資料の天蓋の使用時期は不明。

新19 赤地唐花文錦 (カラー図版№14)

〔資料〕 幡脚垂端飾一枚。

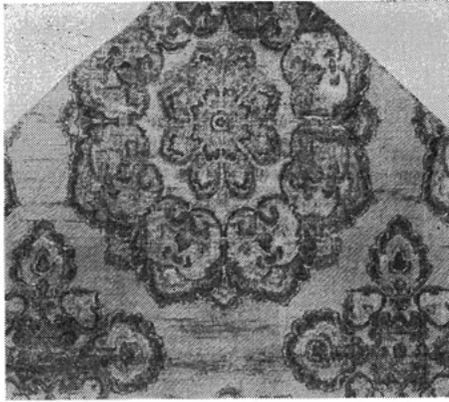
〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。文様は唐花形の正文と菱形花文の副文との千鳥配置である。正文は縦はば半分弱があらわれているにすぎないが、だいたい通常の唐花文らしい。一方副文は、四方に突出する部分がいわゆる花葉でなく、完全な葉形になっている点に、やや特異さを感じられる。配彩は、地部は赤、文様は主・副文ともに中央の空地は紫、文の四方の葉形は浅緑で葉脈は紫、その他の諸部分は浅緑、黄、赤、紫である。経はすべて淡茶色。正文の全体が大きさはわからないが副文の

文巾は約一二・五種に達する。糸込みは一纏間に、表に出る緯約三〇越、母経約一六本。なお本件の資料は一点しか発見されていないが、聖武天皇一周忌齋会用の道場幡の幡脚垂端飾である。

新20 赤地唐花文錦 (カラー図版No.10)

〔資料〕 幡頭二件、天蓋の縁裂二件、用途不明裂小残片一片。

〔所見〕 複様三枚綾組織の緯錦。用彩は、地部が赤、文様は赤、緑、黒紫、黄、白の五色。経はすべて淡紫。文様は巾約二一纏とかなり大形の八弁唐花形の主文と、菱形花文の副文とを千鳥に配しているが、主文の中央の小花の周囲を十字形花弁風に空けている点が、他に例をみないきわめて特異な形式として注目される。しかもこの空間が地部と同じ赤色であらわされているため、中央が透けているような感を呈している。また、一般的にこれくらい大形の錦の唐花文は、主文の外周の花弁のあいだに小さい花弁の先端を覗かせる複弁式が多いのに対し、本件は完全な単弁式であり、前記の中央部の形式とあわせて、主文の雰囲気をやや軽くさせている。No.77A(挿図)のような完成した唐花文は、そのあとしだいに



No.77A 赤地唐花文錦

軽やかなものへと移行していくが、本件は様式上、その移行の比較的早い時期に属するといえよう。資料の幡頭二件中の一件は、この錦を山字形に切り、その左右の袖をうしろに折返して背面中央で縫ぎ、袷の三角形幡頭としたもので、現在一部に欠失があり、織耳も裁ち落されているが、約一二〇纏の織巾中に主文が五箇併列する五葉の広巾錦である。糸込みは一纏間に、表に出る緯約三二越、母経約一三本。資料中の小残片一片は地色を紫に変えている。資料の使用時期はすべて不明。

新21 赤地大花文錦 (カラー図版No.8)

〔資料〕 用途不明裂残片一片。

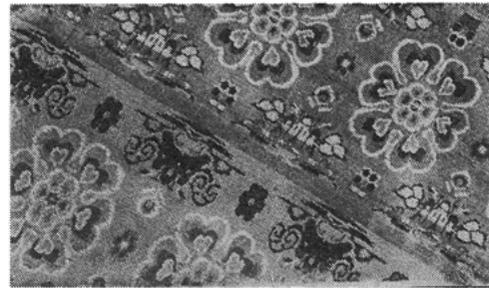
〔所見〕 資料の裂は複様三枚綾組織の緯錦で、現巾五三・五種、現丈一四・五種の長方形。織耳はみえない。文様は裂の中央ほとんどいっぱい大花文、左右の裂端にべつの花文の一部が僅かにあらわれている。前者が主文、後者が副文と思われる。主文は左右対称形で、まんなかにあたかもNo.79の側花を思わせる量綱重層のゆたかな団花風側花文をあらわし、その上方(図版では右端)は樺色空地を隔ててこれもまたかなり大ぶりの花弁の下半分がみえる。また左右(図版では上下)にはNo.75の主文の周囲の蓮華を簡略化したような楕円形の開花がやや斜め上向きに置かれる。そして上部と左右の花文のあいだは、くっきりと目立つ卵形の蓄をのせた大きい葉文で埋めている。中央の団花風側花文と左右の楕円形開花文とのあいだに裾広がりの赤い部分がすこしあらわれているが、これは通常の唐花文の場合でいえば、中央と周辺とのあいだの空地に相当す

るものであろう。本件の主文の現在巾は約三九種だが、現存部の図様から推して、この主文の中心はこの裂のさらに下方(図版では左方)のいま欠失している部分に位置していたと考えられるから、本来の文巾はおそらく四〇種を越え、花文系の錦としてはNo.75につき、No.79に比肩する、すこぶる大型であったことと思われる。各部分を通じてあまりこまかい装飾を加えず、一般の唐花文に較べてあっさりしているが、ともかくも寸法の大きいことは特筆に値いする。また文様内のひろい部分を葉文で埋めている点や、卵形の蓄文も他に例をみない。上代花文錦中、きわめて特殊な作品である。本裂が通常の織巾ならば、いうまでもなく一窠錦である。用彩は、白、赤、茶紫、樺、緑、縹の六色。樺色にみえる部分は、あるいは樺と浅緑にわかれるのかもしれないが、識別は困難である。経はすべて淡紫。糸込みは一種間に、表に出る緯約二六越、母経約一八本。

新22 赤地花山岳文錦 (カラー図版No.11)

〔資料〕 袴の裾縁一件。

〔所見〕 白橡蕨縹繩袴と名付けられている袴の両足の裾にめぐらされている錦である。図版はその片足分の片面を示したのだが、図版にもみえているように上下に継ぎ目があって文様はつながらぬ。ちなみに他方の足の分も本図と同じ錦だが、摩損がはなはだしい。複様三枚綾組織の緯錦で、文様は、丈約八・七種の六弁花文と、頂上に花をあらわした山岳文との千鳥配置で、空間に小花文を配し、それを挟んで山岳文は打



No.123 赤黄段花山岳文錦

返しに織り出されている。この構図および文様箇々のかたちは、寸法の違いを除けば、一見してNo.123の赤黄段花山岳文錦(挿図)と強い近縁関係にあることが明らかである(No.123の六弁花は文丈三・八種)。つぎに本件の用彩は、赤、縹、黄、白、紫(紫は朽損が多い)の五色で、地部はNo.123のような段形式を採らず、赤一色である。しかし図版にみるとおり、黄と白は同じ越しに通らず、紫もまた部分的に織り込まれているにすぎない。すなわち、赤・縹・黄、赤・縹・白の、二種類の三重緯と、そのそれぞれに紫を加えた四重緯の段とで構成されているわけで、この点もNo.123に共通するところがある。おそらくこの両者は同一系統の作家の手になったものであろう。六弁花文や山岳文がかなり便化している点、および既掲新4と同様の薄い錦であることなどからみて、八世紀も後半風の感が強い。糸込みは一種間に、表に出る緯約二三越、母経約一六本。経はすべて淡黄色。